

3人のパネリストによる冒頭プレゼンテーション

漆 紫穂子、工藤勇一先生に続いて、安西祐一郎先生のプレゼンテーションを報告します。

安西祐一郎氏（以下「安西」）：皆様、こんにちは。安西でございます。今、漆先生が、ご自分の学校のことを含めて、未来からのライフデザインとか、あるいは起業、あるいは世界とつながりの重要性などを発表されました。また工藤先生が、自分で考えて行動するという教育の重要性を提言されました。私の感覚では、自分で考えない教員をどうするのか。こういうことも課題ではないかと思っています。



理想と現実の乖離をどうやって解決するのか

漆先生と工藤先生は本当に日本の現場でのリーダーシップを取っておられまして、恐らく現場の教員の方々のマインドを変えていくのに、非常にご苦労もあり、ご尽力もされ、そのリーダーシップを取ってこられたと思います。それはものすごく大事なことでございます。

一方で、高校だけをとっても、1 学年で大体 100 万人以上、日本には生徒さんがいるわけで、また教員もたくさんいるわけです。それから全体を考えたときに、漆先生とか工藤先生のような方が引っ張っておられる考え方には賛同をするが、そういう教育を本当に日本に根付かせていくのにどうしたらいいのかという問題になるわけであります。

例えば、今、工藤先生が言われた、自分で考えて行動するというけれども、でも入試があるじゃないかとなります。自分で考えて行動して入試に通るのかということになります。

時代に取り残された教育現場

1. 入試改革:理想と現実
2. 学校教育:理想と現実
3. 教育格差と学歴格差:理想と現実
4. 学習指導要領:理想と現実
5. 教育のDX:理想と現実
6. 教育と社会の壁:理想と現実
7. 教育界の危機意識と主体性を問う

©Yuichiro Anzai

2

入試への取組や時代にマッチした教育をどうするか

入試改革、いろいろあります。大学入学共通テストになっていますけれども、もともとは国立大学志願者のためのミニマムレベルの評価をする、いわゆるセンター入試の前の1979年からあるわけであります。その歴史を引きずっていて、国公立大学向けと私立大学向けにかなり分かれています。

私立大学については高等学校で、私立文系は2教科、3教科だから、大体2年生のときに地歴公民を取った方が数学取るよりいいというようなことが起こっているわけです。

一体これを生徒はどうやって乗り越えていくのか。学校の先生はそういうふうにコントロールしていくのを、どう乗り越えていくのか。入試は、ある程度標準的な方法は必要だと思っています。

ではどうしたらいいのか。やっぱり理想と現実がある。学校教育にしても、ここに書いてありますこと、みんなそれぞれ理想と現実があります。私の分野であるDXの時代だといいますが、学習指導要領が数学とこれからのDXの時代ということと本当にマッチしているのかということがあります。

あるいは、国語と英語、学習指導要領の解説編。これをご存じの方はよくお分かりだと思いますけど、いろいろなことが書いてあるわけです。中には国語と

英語のコミュニケーションを取ってほしいと書いてあります。でも国語科と英語科の先生はコミュニケーション取っているのでしょうか。私の聞いた限りでは、100%取っていません。

でも国語と英語はありますし、構造の共通点があるわけです。私も認知の問題とAIをやっているのもそっちから見ますと、心のメカニズム、現場の問題をしっかりと考え直し、カリキュラムをつくっていかなくやならないと思います。しかし、全くそのようにはなっていません。

教育の危機意識を持続しなかった

スライドの一番下の7に掲げた「主体性と危機意識」。これは今の両先生には100%以上おありになるので、ここで申し上げることはありませんが、一般にはまだなかなかという状況があります。

これも大学入試改善に向けた指針案というのを、初めて文科省が出したというので話題になりましたけれども、その中で、私大入試で課す科目が少ないとか、あるいは大学側でもう問題をつくれなから、過去問使ってもいいよとか、それを文科省が言っているわけです。

では入試って何なんだろうということになります。どうやって入試の構造をつくっていくのか。これは20年ぐらい前、既に入試というのをどうするかということは中教審でも議論があったのです。その時点で将来の入試をどうするかということ具体的に検討を始めるべきだったと思います。それがなされていなかったというのは、非常に大きな課題だったと思います。

【例：入試改革：理想と現実】

大学入学共通テストによる国公立大学と私立大学の分断

大学入試改善に向けた指針案

(2023.1.25 文科省中央教育審議会大学分科会)

1. 私立大学入試で課す科目が少ない
 - ▣ 一年次の授業に必要な科目は入試に課す。
2. 大学教員による質の高い問題作成が難しい状況
 - ▣ 過去問の利用、大学間での相互利用も選択肢。
3. その他

それから、今日は中高ですけれども、高等学校の問題として一番根底にあるのは、高校への進学率が今 98%ぐらいになっている。ほぼ義務教育に近いわけです。人口減少の中でこういうことが生じている。

高等学校教育の深層

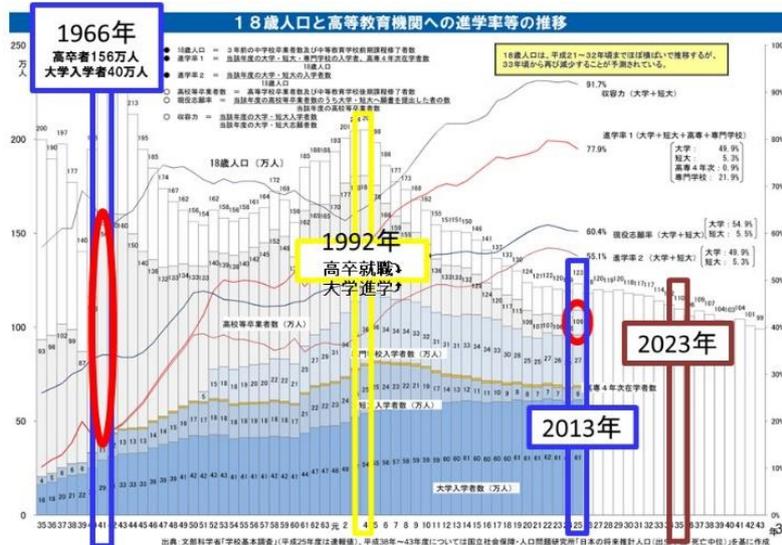
1. 高校進学率 約98%
2. 高卒就職率約15% 専門学校進学率約22% 大学短大進学率約56%
3. 大学入試予備校としての高等学校
4. 大学(国立・公立・私立)・社会(企業・官庁・自治体)の格差の影響
5. 高校間格差(大学受験、国公立と私立、設置形態)の実態
6. 生徒の多様性を無視、自我意識の発達を無視、閉じた環境での教育
7. 生徒の成績評価の多角化ができない高校教育
8. 教員・職員の数と質の課題
9. 幼児教育・保育無償化、高等学校等就学支援金制度、高等教育修学支援制度、異次元の少子化対策は、高校教育の立て直しに役立つか？
10. 教育界の既得権益
11. 出口(大学、企業、官庁等)と社会(国民、行政、政治)の責任

4

消えてしまった高校卒業生

このスライドは、横軸は年次で、縦軸が 18 歳人口ですが、大体 1966 年頃の 18 歳人口、これは大体高校を卒業して就職した人たちの数なんです。それが 2013 年になると、あの小さい赤丸になる。

これはどういう違いかというと、大体 100 万人以上が高校を卒業して、昔は就職しているのが、それがいなくなったという現実です。大学入学者数は徐々に増えているわけです。それから、専門学校出てきている。こういう中でもって、結局高校を卒業した働く人が 100 万人消えちゃったということになります。



1989 ベルリンの壁崩壊 以上上記グラフより概算 2013年(18歳人口123万人)
 1991 経済バブル崩壊 4大入学者数 61 短大入学者数 6 専門学校入学者数 27
 1995頃 インターネット・携帯商用化 高校卒業生数 109 (高卒就職者数概算<13) その他 14 5

ということは、大学の方の教育をしっかりやって、日本がイノベーション立国を目指していくべきだったのです。国や大学は本当にそれをやってきたのか。大学の数は増えています。でも、大学教育の内容が、いろんな大学がありますが、私から見ても本当に大学教育やっているのかと考えざるを得ません。これは人口減少とも関係があって、18歳人口が減ると大学側は高校生の奪い合いになります。そうすると入試どころじゃない。とにかく来てくれないと経営が成り立たない。そういう大学で教育が成り立つのかという問題になります。

中・高校教育施策の立て直し

1. 発達過程に応じたオープン化(学年、教科、文理、中高、高大、高校と社会、国際、入試、採用、その他: DXによるオープン化)
 ⇒ 中学は基礎知識と社会性、高校は個別の学びと社会性
2. 知識を鍛える + 社会的関係を築く力をつける
3. イノベーションスキル育成の標準カリキュラム
4. 判断力の基盤としてのリベラルアーツ養成の標準カリキュラム
5. 複々線・乗り換え可能なキャリアパス(学び直し、転学、地域、就職、雇用、その他)の確立(ジョブ型雇用の意味ではない)
6. 大学入試改革と大学教育改革の断行
7. 教育弱者支援の抜本的強化(ただし、複々線キャリアパス確立、および高校教育・大学教育の質の向上と連動)
8. 学校教員の質の向上・キャリア形成・給与アップ
9. 2030(2040?)年の高校学習指導要領の柱は「思考力」「判断力」「表現力」から「社会性」と「臨機応変力」の育成へ
10. 教育未来政策と教育未来予算2026~2040

©Yuichiro Anzai

高校教育は諸問題点の交差点にある

問題点ばかり、声を張り上げて言ってもしょうがないのですが、高校の問題というのは、結局ここへ行き着くのではないか。結局高校というのは、大学入試予備校になりつつある。高校はかなり多様なので、不登校とか様々な問題を抱えている高校もある。それから普通科高校だけじゃないのでいろんな設置形態がある。そういう多様な高等学校の教育をどのゆおにしていってきちっと底上げをしていくのか。

工藤先生が言われたような世界の移り変わり、このような時代に本当に幸せにかつ自分の生活をちゃんと支えていくことができるスキルや知識、あるいは社会性、これを身に付けさせてあげるという問題になるわけです。

中・高校教育施策の立て直し

1. 発達過程に応じたオープン化(学年、教科、文理、中高、高大、高校と社会、国際、入試、採用、その他；DXによるオープン化)
⇒ 中学は基礎知識と社会性、高校は個別の学びと社会性
2. 知識を鍛える + 社会的関係を築く力をつける
3. イノベーションスキル育成の標準カリキュラム
4. 判断力の基盤としてのリベラルアーツ養成の標準カリキュラム
5. 複々線・乗り換え可能なキャリアパス(学び直し、転学、地域、就職、雇用、その他)の確立(ジョブ型雇用の意味ではない)
6. 大学入試改革と大学教育改革の断行
7. 教育弱者支援の抜本的強化(ただし、複々線キャリアパス確立、および高校教育・大学教育の質の向上と連動)
8. 学校教員の質の向上・キャリア形成・給与アップ
9. 2030(2040?)年の高校学習指導要領の柱は「思考力」「判断力」「表現力」から「社会性」と「臨機応変力」の育成へ
10. 教育未来政策と教育未来予算2026~2040

©Yuichiro Anzai

6

では、どうやって立て直しをしていけばいいのか。これは本当に大きな課題で、特に高等学校というのは、私には問題点の交差点に見えています。これは高校の先生が問題じゃなくて、今申し上げたのは構造的なものです。人口が減少していく中で、高校を卒業した働く人が10万人ちょっとしかなくなってしまって、大学ばかり行くようになった。

じゃあ、大学で本当に教えているのかという問題になってきます。そんな中でさらに就活の問題がある。エントリーシートだけでどうだとか、大学はもうてんやわんやの大騒ぎです。そういう時代にあっても人口が減少しているから、就職率はいいのです。

できるだけ人気企業に行きたいというのがあり、結局出口にあたる社会の側が

どうなるかということでも大学は変わるし、大学がどうなるかで高校が変わるということになります。そういう状況の中で高校教育を転換していくのにはどうしたらいいのか。やっぱり現実的には少しずつやらざるを得ない。

- 1 知識を鍛える
 - 2 経験から学ぶ
 - 3 認知バイアスから脱却するスキルを学ぶ
 - 4 知識をチャンク化するスキルを学ぶ
 - 5 合理的思考のスキルを学ぶ
 - 6 「目標を発見する」体験を得る
 - 7 自分の得意・不得意を理解する
 - 8 協働学習に(目標を持って)参加する
 - 9 歴史の見方と世界動向の見方を学ぶ
 - 10 尊敬できる人を見つける
 - 11 「ことばの力」をつける
 - 12 「社会的関係を築く力」をつける
- 12の「学びの基本項目」**
(『教育の未来—変革の世紀を生き抜くために』より)
- 

発達の過程をちゃんと重視したオープン化を図っていくべきです。高校生は、自我が本当にでき上がっていく非常に重要な時期にあります。私は多少心理学をやっているものですが、そっちで申し上げると、そういう時期にありましてその自我の芽生えということは、個性が育っていく時期になります。そういう時期を大事にして、彼らを応援していかなければいけない。ところが入試のこととからいろんなことがあって、それがなかなか押さえつけられたまま大学へ行くことになる。大学へ行っていきなりアクティブラーニングがどうしたとか言われても、時すでに遅しとなります。やはり高校時代にアクティブラーニングをちゃんとやって、それを大学で鍛えるということでしょう。知識を鍛えるということの方が大事だと思っています。あとはここにあげた諸課題がいろいろありますが、時間の都合で詳細は割愛して課題だけをあげてみます。

認知バイアスから脱却するスキルを学ぶ

1. 正しい情報かどうかを吟味する。
2. 意味のある情報かどうかを吟味する。
3. 一次情報(一次資料など)にあたってみる。
4. できるかぎり多くの信頼できる関連情報を収集する。
5. 信頼できる出所からの情報かどうかを吟味する。
6. その情報に対して「なぜ」、「だから」を問うてみる。
7. その情報を、違うことばを使って要約してみる。
8. その情報の例をあげてみる。
9. その情報と類似の情報を自分で考えてみる。
10. その情報についての自分の考えを人に話したり書いたりしてみる。

©Yuichiro Anzai

8

「目標を発見する」体験を得る

1. 自分で目標を発見する。目標設定の意義を知る。
2. 情報収集の意義とその限界を知る。
3. 経験的知識と合理的思考の役割を知る。
4. 問題の理解と表現の方法を知る。
5. メタ認知の役割を知る。
6. 論旨明快に思考し、相手の立場を考慮して、論旨明快に表現する。
7. 以上を専門科目の中で実践する。

©Yuichiro Anzai

9

今日参加したパネリストのお二方の先生が引っ張っていただけていますが、それがどう広がっていくか。これは漆先生も工藤先生も大変ご尽力されておられるのですが、いまこそ日本の勝負どころだと見ています。

私がときたま言われるのは、「あいつは大きな話だけしている。実際のカリキュラム、現場のことが全然分かっていないんじゃない」と言われているようですので、2022年8月に出した書物の中で詳しく書いています。

高等学校レベル、あるいは大学初年級、ここで本格的にカリキュラムを組んで

いくとすれば、どういうカリキュラムがあるのかという話を書いております。それも細かいことは書けないのですが、12の学びの基本項目というのを書いております。本の中にはこれ一つ一つ細かく書いていますが、こういうことを埋め込んでいくべきだと考えています。

歴史の見方やことばの力が重要

一方で、学習指導要領で教科、科目ありますので、そこへどうやってこれを埋め込めるのか。何かオムニバスの講義をつくって、外部から人が来てちょっとお話しをいただくというのではなく、教科科目の専任の先生がちゃんと教えていくような、学びのあり方に変えていくべきだと思っています。例えば歴史の見方を学ぶ、あるいは世界の見方を学ぶことも重要です。

歴史の見方を学ぶ

例えば、文章や年表、地図、図表等の資料から、歴史に関する情報を整理し、その時代の人々が直面した問題や現代的な視点からの課題を見だし、その原因や影響、あるいは解決策等についての仮説を立て、諸資料に基づき多面的・多角的に考察し、その妥当性を検証して考えをまとめ、根拠に基づき表現する力などが考えられる。

（「歴史的思考力」とは 日本学術会議より）

©Yuichiro Anzai

10

例えば仮説を立てるとか、いろんなことを高校でもやっておられますけれども、歴史的思考力について学術会議でも出していますが、このような学びのためのスキルをしっかり身に付けていくことが大事なんじゃないかと思います。

「ことばの力」をつける

「論旨明快に思考し、相手の立場を考慮して、
論旨明快に表現する」力をつける

- 「論旨明快」は「論理的」とは違う。
- 「論旨明快」とは、以下のような点(以下は「書く」場合)を総合的に勘案したうえで、書き手(あるいは話し手)の意図を読み手が即座に理解できるようにする、ということ：
 1. 読み手の立場、書き手の立場、文書の目的、書き手の意図、伝えたい事柄、文脈
 2. 語彙、形態、文法、文体、音韻、**リズム**、語句、文間の関係、段落間の関係
 3. 文章や図表の構造、事実、意見、説明、例などの区別
 4. 読みやすさ(係り受け(日本語の場合)の位置、段落の立て方、文の長さ、全体の文章の長さ)
 5. 情報伝達・情報理解のスピードと情報伝達量の関係を重視
 6. その他

©Yuichiro Anzai

11

言葉の力という問題もあります。日本人の場合、世界で活躍してもらうには言葉の力が大事です。自分の言葉で人に語るということができることが大事であり、そのための教育をどうやってやるのか。

これを高校の先生に申し上げると、標準的なカリキュラムつくってくれと言われる。おっしゃる通りであり標準的な方法をきちっと作っていかないと簡単にはいきません。現場の先生方のためには大事なことだと思っております。

人の能力を発見し磨く教育をどうするか

私どもは教育の理念というのは、工藤先生おっしゃったことに通じるものですが、自分で考えて自分で行動する。私は福沢諭吉門下としては、「独立自尊」ということですがけれども、人は誰でも多くの能力を秘めてこの世に出てきます。その能力をどうやって自分で発見し、自分で自律的に見つめていくか。この大事なことをどうやって応援していけるのかということに尽きると思います。

人は誰でも、多くの能力を秘めてこの世に生まれてくる。
その能力を自分で発見し、磨き、他者に貢献することを通して、よろこびと毎日の糧を得る。

この世に生まれてくる人間一人ひとりがこうした人生を送れるようにすること、それがこれからの教育の役割である。

このような教育によって、活力に溢れた多様な人間が育ち、その人たちによって新しい多様な価値が生まれる。

多くの人々が協力しあい、それらの価値を蓄積し、活用することによって、活力に満ちた社会が生まれ、日本は世界に貢献していくことができる。

それがこれからの日本の姿である。

『教育が日本をひらくーグローバル世紀への提言』
慶應義塾大学出版会(2008)より

12

©Yuichiro Anzai

才能ある若い人たちを育むことによって、活力を持った人生を歩んでいくことが、社会を活性化していくことであり、日本の未来をつ作っていくことにつながっていきます。理想主義に聞こえるかもしれませんが、教育の目的というのは、何のために教えるのかということをしっかり持っていなければならない。それは教育者によって違うかもしれませんが、これは私が思うことを申し上げました。

本日のシンポジウムに参加している皆さんと一緒に、これからの時代の学びの場をつくり、それが日本の未来を作っていくという共通認識をもっていきたいと思っております。

以上